

「地図にない領域」への旅立ち  
 ——*Daniel Deronda* における  
 Gwendolen Harleth の性格造型の一分析——

高本 孝子

A Departure for the "Unmapped Country"  
 ——An Analysis of the Characterization of Gwendolen  
 Harleth in *Daniel Deronda*——  
 Takako Takamoto

One of the most distinguished characteristics of the so-called Gwendolen Harleth plot in *Daniel Deronda*, George Eliot's last novel, is that she suggests for the first time in her career that most of man's mental activities take place in subconsciousness. It is evident in the characterization of Gwendolen, whose conflict between good and evil is described as that between the dread of avenging powers for her evil deeds and her egoistic desires. And the more intense of the two decides her conduct regardless of the choice that her reasoning makes. This means that Eliot anticipated a Freudian theory about the super-ego and the id almost 20 years before the publication of "Studien über Hysterie". Another characteristic of the Gwendolen plot is that it reveals to some extent a sexual aspect in human relationships. Seen from this viewpoint, the apparently irrelevant miscellaneous details, which Eliot wrote without any intention of correlating, come to have meanings and help the plot achieve an organic unity.

序

George Eliot の最後の小説 *Daniel Deronda* においては、彼女の他の主な作品においてと同様、相互に何らかの関連をもちつつも原則的には独立した二つのプロットが並行して進んでいくという体裁がとられている。二つのプロットのうち一つは、ダニエル・デロンダを主人公とする、いわゆるダニエル・プロットであり、そのあらすじは、イギリス人紳士として育てられたダニエルが、ユダヤ人の Mirah, Mordecai との交際を通じてユダヤ人問題

に目を開かされ、さらに自分がユダヤ人であるという出生を知ることによって、ユダヤ人国家の建設という己の天命を見出すというものである。また、もう一つの Gwendolen Harleth を主人公とするいわゆるグエンドリン・プロットは、自分中心にしか物事を見ることのできない女性グエンドリンが、別のある女性を犠牲にして上流階級の男性と結婚するが、そのことから生じる良心の苛責、そしてダニエルの導きを通じ、苦しみながらも次第にエゴイズムを脱却してゆくという過程を描いたものである。この二つのプロットについて、ダニエル・プロッ

トにエリオットの最悪の部分が、そしてグエンドリン・プロットに最良の部分が集約されているというのが、F.R.Leavisをはじめおおかたの一致した意見である。<sup>1</sup>本稿において解明したいと思うのは、なぜグエンドリン・プロットがエリオットの最良の部分だといえるのかということである。あらずじだけを見た場合、グエンドリン・プロットはエリオットの他の作品と同じくエゴイズムからの脱却をテーマとしており、特に他作品とのちがいは認められない。しかし実際に通読してみると、グエンドリン・プロットには従来にはなかった新しい要素が多々あり、また、グエンドリンの性格造型は他の主人公たちの性格造型に比べ、より複雑なものであることが感じられる。グエンドリン・プロットが最良であるとすれば、それはグエンドリンの性格造型において、エリオットのそれまでの小説に存在している要素と、グエンドリン・プロットにおいて初めて現れる要素とが見事に融合しているからではないだろうか。よって本稿ではグエンドリン・プロット、特にグエンドリンの性格造型を分析することにより、新しい要素とは何か、そしてそれは従来の要素とどう融合しているかを考察してみたい。

## 1.

ジョージ・エリオットが人間を理解する上での基本点には、個々の人間は彼または彼女がおかれた社会と無縁の存在ではなく、相互に影響を及ぼしあっているというものである。よって彼女は処女作 *Scenes of Clerical Life* 以来一貫して、人間をその置かれた社会との関わりにおいて描こうとする宿命論的立場をとってきた。<sup>2</sup>グエンドリン・プロットにおいてもその姿勢は変わっていない。グエンドリンの思考、行動は常に自分が“lady”すなわち上流階級の女性であるという自覚のもとに為されるのであり、それ以下の階級の者と思われたり、あるいは実際にそういった階級に身をおとすことなど彼女は夢にも思わない。たとえば彼女は狩りに参加したくてたまらないが、おさんどん上がりの義勇農騎兵の隊長の妻 Mrs. Gadsby が実際に狩りに参加しているのを見て、彼女と同類だとは絶対に思われたくないために、狩りへの参加をししぶあきらめる。 “[T] he demand to be held a lady was in her very marrow.”<sup>3</sup> (「淑女だと思われたい気持ちの骨髄まで染みついてた。」)

グエンドリンの抱く価値観も、彼女がその一員であるところの上流階級のそれをそっくり受け継いだものである。それが如何に浅薄なものであるかを、エリオットは、

グエンドリンをとりまく人々一人一人についての皮肉のきいた描写を積み重ねてゆくことによって浮き彫りにしている。たとえば Mrs. Arrowpoint は Tasso の狂気についての文章をものする自称インテリ女性であるが、彼女がタッソーの生き方を真剣に受けとめ、彼女の人間性に対する洞察を深めたのではなく、あくまで「趣味・教養」を身につけるとい程度にとどまっていることは、彼女が娘 Catherine と音楽家 Herr Klesmer との結婚に猛反対することから明らかである。また、上流階級の男たちは通常大学教育を受けるが、それが「教養」をちらつかせる道具として使われるだけで、無為徒食の徒として一生を過ごすことは、Mallinger Grandcourt や Mr. Vandernoot を見れば明らかである。その外、政治の墮落は Mr. Bult によって、宗教の形骸化はグエンドリンの伯父 Mr. Gascoigne によって体現化されている。

こういった浅薄な価値観にとり囲まれ、しかも生来のエゴイズムと支配欲、そして己に対する絶対の自信をもったグエンドリンが、美貌と快活さがあれば世の中を御していけると信じこみ、その生活が“sphere of fashion” (p. 83) の中に過ごされたというのも当然であろう。グエンドリンの人生観は次の言葉に集約されている。

She meant to do what was pleasant to herself in a striking manner; or rather, whatever she could do so as to strike others with admiration and get in that reflected way a more ardent sense of living, seemed pleasant to her fancy. (p. 69)

何よりも、上流社会の価値観の浅薄さは、結婚に対する考え方のうちに見出される。アロウポイント夫妻がキャサリンの夫の選択に激怒したのは、貧乏な貴族あるいは貴族階級に成り上がろうとする平民に嫁ぐことが資産家の娘の「社会的義務」だと思っていたからである。一方グエンドリンの伯父ガスコインはグエンドリンの美貌と才気を餌に、あわよくば貴族で金持ちの男性をつかまえさせようと思う。もちろん姪のたを思っていることであつたが、ガスコインにとってグエンドリンを幸福にすることは、彼女に大庭園や自家用四輪馬車や称号が付随するぜいたくな生活をおくらせてやることに外ならなかつた。ゆえに彼はグランドコートについて、彼と知りあう前からすでに、他の人間ならば許せないであろう習癖についても寛大に見るつもりであつたし、実際彼の過去の色恋沙汰についての噂を耳にしても、現在身をも

ちくずしていないならば、かえって将来の愚行に対する歯止めになるだろうと考え、自分で自分を納得させる。それがガスコインにとっての“practical wisdom” (p. 177)なのであった。よって彼はその噂をグエンドリンから隠しておくこととする。

グエンドリン自身の結婚観も伯父のそれと寸分違わぬものであった。しかも若さゆえにもっともらしい理屈さえもまとませずにあからさまにそれを口にし、伯父を驚かせる。

‘I’m not foolish. I know that I must be married some time — before it is too late. And I don’t see how I could do better than marry Mr. Grandcourt. I mean to accept him, if possible.’ (p. 179)

ガスコインにとっても同様、グエンドリンにとってもグランドコートは一人の人間として以前に、貴族になる可能性をもった財産家としてとらえられている。彼女の心はグランドコートを虜にすることに傾けられ、彼の一挙手一投足を意識し、彼に注目されると有頂天になる。作者は「グエンドリンは支配欲自体が一種の服従であることを考えたことがなかった」(p. 139)というコメントを付しているが、このようにグエンドリンはグランドコートに紹介される前からすでに彼の社会的身分に眩惑されていたのである。グエンドリンがグランドコートと交際を始めてからも、彼の人間性に対する洞察は、箱入り娘ゆえの無知もあずかって、表面的なもの以上にはならない。彼女が理解し得たのは、彼が物静かで馬鹿げた言動をしない、いろいろな所に行っているいろいろなものを見てきた、何事にもあまり夢中になって楽しまない、ということだけである。グエンドリンにとって一番重要なことは、グランドコートがどういう人間かということではなく、彼が自分の望みを満たしてくれるかどうかであった。

以上見てきたように、グエンドリンの価値観・人生観はまことに浅薄なものであり、そしてそれは取りも直さず彼女の属する上流階級の価値観の浅薄さを反映するものである。株操作の失敗により Davilow 一家は無一文となり、グエンドリンは家庭教師となることを迫られる。このことが彼女にとって“descend in life” (p. 317)としてしか思えないのは当然であろう。勤労を美德とするピューリタンの価値観は、無為の生活を最高の生き方とする上流階級には存在しないからだ。また、グラン

ドコートのように「男は紳士であるかそうでないかだけ」(p. 475)という価値基準をもつ社会に生き、しかも人の上に立つことに対し焦がれるような欲求をもつグエンドリンにとって、貴族も労働者も同じ人間であるという民主主義精神は無縁だったのである。ガスコインは世知と、形骸化してはいるものの宗教の教えをよりどころとして現実に対処していくが、「ちょうどある人々が算数や勘定を嫌うように宗教を嫌悪し、宗教が何の不安も、何の欲求も起こすことのない」(p. 94)ようなグエンドリンにとっては、上流階級からはじき出されることは、自分の存在理由そのものを否定されることに等しかった。「[T]he demand to be held a lady was in her very marrow.」という言葉は、単なる比喩ではなく、グエンドリンにとっては事実そのものを表しているといっていだろう。

## 2.

ジョージ・エリオットのこれまでの小説においては、登場人物たちが意識的にせよ無意識にせよ、ある特定の問題について善か悪かの選択を行なう場合、常にそこにはその人物たちの過去が影響を及ぼしており、過去における彼らの行動の集積が、彼らの選択となって表れるということが主張されてきた。たとえば、*The Mill on the Floss*において Maggie Tulliver が St. Oggis に帰ったのは、兄 Tom、従姉 Lucy、幼なじみの Philip に対する、過去に培われた愛情を裏切りたくないという気持ちが誘惑に打ち勝ったからであった。また、無意識に悪の選択を行なう人物に *Romola* の Tito Melema がいるが、彼は義父 Baldassarre に腕をつかまれた時、自分でも思いがけず彼を無視してしまう。ティートはあとになって、時宜を得た巧妙な嘘をつけば致命的な成り行きから免れられたかもしれないのに、といまいましく思い返す。しかしながら、義父を決定的に裏切るという瞬間的な選択は、実は彼を救出に行かなかったこと、彼の宝石を金に代えてしまったことという、過去の裏切りの行為の集積によってすでに為されていたものだったのである。エリオットは次のように述べている。「ティートは、徐々に人の性格を決定してゆく善悪の選択のくり返しということを通してわれわれは突然の作為の下ごしらえをしているのだという、あの人間の魂の非情な旋を、いま経験していた。」<sup>4</sup>

過去と現在との間に因果関係を求めるこのような考え方もまた、宿命論に基づいたものであるが、グエンドリン・ハーレスの性格造型においてはどのようにとらえら

れているだろうか。物語の初めの段階においては、エリオットのこれまでの小説における主人公たちと同じく、グエンドリンは“inborn energy of egoistic desire” (p. 71) をもった人間として提示されており、そのエネルギーに屈して限りなくエゴイズムを増長させ、道徳的墮落の途をたどるか、それともそのエネルギーを良心の力によって抑制し、エゴイズムを脱却することができるかの二つの可能性があることが示唆される。ここにおいて興味をひくのは、グエンドリンの中には、不正を行なうことに対する恐怖という形で存在している彼女の良心と、他人を犠牲にしてでも快楽を得たいというエゴイスティックな欲望とが、ほとんど本能に近い感覚のレベルで存在し、せめぎあっているということである。

グエンドリンのエゴイスティックな欲望は、前節で述べたように、彼女の意識の大部分を形成するのみならず、己の安寧・快楽を妨げるものに対する破壊的な衝動としても存在している。たとえば彼女は子どもの頃、平生は溺れている昆虫を助けてその回復を喜ぶような気だてのやさしい子どもであったにもかかわらず、ある日うるさく鳴いて自分の歌うのを邪魔するカナリヤを「腹を立てたあげく、ついに発作的に絞め殺してしまった」(p. 53) (傍点筆者) ことがあった。そのような発作的な殺意はグエンドリン自身にも意外なものであり、この出来事は人にも話せない不愉快な記憶として残る。

一方、グエンドリンにおける良心もまた、彼女の意識下に、不正な行ないや邪悪なものに対する恐怖として存在している。たとえば求婚者のグランドコートに愛人がおり、子どもまでもうけていたことを知ったとき、彼女はグランドコートの元を離れ、Leubronnへ行くが、それはレディとしてのプライドからだけではなく、“her dread of wrong-doing” (「よこしまな行為を為すことに対する恐れ」) (p. 342) からでもあった。その衝動は漠然としていて、確かに「日常生活の様々な事柄からかけ離れてはいたが、それにもかかわらず強烈なものであった。」(p. 342) また、グエンドリンは、グランドコートの求婚を受け入れてからは、自分の犯した悪に対して何らかの天罰が下るのではないかという恐怖にとらわれる。

... all the infiltrated influences of disregarded religious teaching, as well as the deeper impressions of something awful and inexorable enveloping her, seemed to concentrate themselves in the vague con-

ceptions of avenging powers. (p. 356)

このように、グエンドリンの悪に対する畏れは、マギーの場合とは異なり、彼女の過去の間人間関係において培われたものではなく、もっと本能的なものとしてとらえられている。そして、彼女の人格を形成しているこのような要素について、エリオットは従来のように直接にそれを例証するようなエピソード、たとえばカナリヤのエピソードの逆をいくものを読者に提供するのではなく、一見無関係に見えるエピソードを提供し、読者に連想を促すことによって間接的に例証を行なっている。たとえば、エリオットはグエンドリンが“fits of spiritual dread” (p. 94) におかされやすいというエピソードを紹介する。彼女は光が突然変わって一人きりでいることを感じたり、何か景色の開けた場所に一人きりでいると、理由もなく恐怖におそわれる。また、シャレードの最中にパネルが開いて死人の顔が目の前に現われたとき、彼女は一瞬の狂気ともいえるほどの恐怖を感じ、悲鳴をあげる。エリオットはグエンドリンのこのような恐怖に対する人並外れた感受性について何ら説明を加えない。そのかわり、のちに彼女の救済者となるダニエルが彼女のために買った黒いネックレスについて、「なぜ突然にそのネックレスを手放すまいと決意したかは、ただ一人野原にいと、なぜときどき怖くなるのかと同じように、彼女にもはつきりしないことであった。」(p. 321) と述べたり、また、ヨットの中でグランドコートに対する殺意が高まったとき、彼女にパネルの中の死人の顔を思い出させたりしている。また第35章のエピグラフには「正義の陰画である恐怖」(p. 455) という言葉もあり、エリオットがグエンドリンの良心を悪に対する恐怖としてとらえ、さらにそれを「超自然的な畏れ」と関連づけようとしていることは明らかである。

このように、グエンドリンの中にはあくまで快楽を追求しようとする欲求と、それを抑制する良心とが共存し、その二つは彼女の意識下にあっては、快楽を妨げるものに対する破壊衝動と、それに対して下されるであろう天罰に対する恐怖として存在している。そして、この両者が相容れないものとして対立する場合には、どちらに従って行動するかは選択は、思考を積み重ねた末に意識的に為されるのではなく、半ば衝動的に、無意識のうちに為される。たとえば、グランドコートの求婚を受け入れたグエンドリンは、自分が先に不正だと直感したことを行なったことで、“the border of wickedness” (p. 359)

を越えたと感じるが、悪の領域に踏み入るといふこの選択は、熟考の末下した決断ではなく、半ば無意識のうちに為されたものであった。グランドコートから求婚に対する最終的な返答を迫られたとき、グエンドリンは「自分でも驚くほどに、グランドコートが馬に乗って去っていく姿のイメージに突然の驚愕を感じ」(p. 346)、半ば無意識のうちに「はい」と答える。<sup>5</sup>

グエンドリンの選択をティートの選択と比べてみた場合、結果においては己のエゴイズムの満足を喜びとるといふ点で同じではあるが、そこに至る経過は質を異にしていることは明らかであろう。ティートの場合は、義父を正面きって無視するというとっさの行為は、過去の行為の集積の結果としていわば自動的に為されたものであったが、グエンドリンの場合は、生来のエゴイズムと、上流階級という環境の中で骨の髄まで染みついてしまったレディたるべき欲求が、彼女の行動を自動的に決定してしまったのではない。彼女の中には、過去と現在両方における彼女自身の行為や彼女の置かれた環境とは全く無関係なものとして、良心—悪の行為に対して下されるであろう天罰に対する恐怖—が存在しており、この相反する二つの欲求が無意識の領域においてせめぎあい、欲求のより強烈な方が彼女の言動を支配したのである。すなわち、レディでいたいという欲求が弱い方の欲求—悪を行ないたくないという欲求—を無意識の外へはじき出してしまったのである。彼女はロイブロンに行ったときの自分の衝動を論理的に分析し、求婚を拒絶する決心を貫こうとするが、衝動を論理的に分析すること自体、すでにその「衝動」がもはや「衝動」ではなくなっていることを示している。エリオットはそれを次の文章において実に巧みに表している。

... she had been so occupied with perpetually alternating images and arguments for and against the possibility of her marrying Grandcourt, that the conclusion which she had determined on beforehand ceased to have any hold on her consciousness:.... She would have expressed her resolve as before; but it was a form out of which the blood had been sucked — no more a part of quivering life than the 'God's will be done' of one who is eagerly watching chances. (p. 341)

彼女の意識的な決断はすでに「血を抜かれ」たものとして実質的な拘束力を失ってしまっており、その背景にはレディから家庭教師に転落することに対する恐怖が

あった。このような、無意識における良心と快楽追求の欲望の葛藤という図式、また意識的努力にもかかわらず、無意識を支配する欲求が人間の言動をも支配し得るといふことに対する認識は、精神分析学における超自我とイドの葛藤という理論を想起させるが、Freudが著名な論文「ヒステリーについての研究 (Studien über Hysterie)」を1895年に出版する19年も前にすでにエリオットはその理論を理くつとしてでなく直感的に把握していたのである。

グエンドリンは結婚後ダニエルと交際を始め、彼を「良心の一部」とみなすことで少しづつ己の超自我を強固にし、また読書により理論的枠組みを与えようとする。だが、グランドコートに対する「道徳的嫌悪感」、彼の支配から解放されたいという欲求が殺人の衝動となって彼女の行動を支配しようとする。ダニエルから切り離されたヨットの中で、彼女はグランドコートを殺して彼の支配から逃れるという夢や妄想に悩まされ、彼女の意識的思考はほとんど麻痺状態にまで至る。ダニエルを知る前のグエンドリンだったならば、不正に対する漠然とした恐怖などは、このような強烈な殺意の前には全く無力だったであろう。そのような強烈な殺意に歯止めをかけたのは、過去における己の不正な行ないに対する良心の苛責と、ダニエルに罪人だと思われたくないという願いであった。この葛藤はもはや思考という形すらとらず、グエンドリンは自分の心の中で善と悪とが対峙しているのを、売買にかけられた奴隷のように、ただ見守ることしかできず、苦悶の中でこの葛藤から逃れたいと祈る。

In Gwendolen's consciousness Temptation and Dread met and stared like two pale phantoms, each seeing itself in the other — each obstructed by its own image: and all the while her fuller self beheld the apparitions and sobbed for deliverance from them. (p. 738)

果たして、グランドコートが海に落ちたとき、グエンドリンは一瞬の殺意にとらわれるが、次の瞬間海に飛び込む。ここにおいて、善か悪かの選択は瞬間的に為されたものであり、それゆえ殺人の「誘惑」と悪に対する「恐怖」のうち強烈さにおいて勝っている方がグエンドリンの行動を支配したわけだが、最終的には前回とは異なり、悪に対する「恐怖」が勝利したのである。このように、グエンドリンのエゴイズムとの闘いを描くことによりエリオットが主張しようとしたのは次のようなことであら

う。すなわち、個々人の倫理的行動を行なわせる超自我は無意識の領域にあるため、少々の意識的努力では容易に強固にならない。だが一方、ちょうど上流階級という環境がグエンドリンの人格形成に大きな影響を及ぼしたように、意識的努力も無意識の外側から働きかけることによって超自我を強固にし、徐々にせよ人格を高めていくことができるのである。

### 3.

次にグエンドリンの性格造型を、彼女のグランドコート、ダニエルそれぞれとの関係において考察してみたい。まずグランドコートであるが、彼の性格造型において特筆すべきことは、彼が人を苦しめることに快感をおぼえるという、悪そのものを喜ぶ人間だということである。エリオットのこれまでの小説においては、このような人物像は *Silas Marner* における *Dunstan Cass* のように、ほんの脇役に描かれることはあったものの、たいていの場合、彼女が描く悪人像とはティートや *Middlemarch* における *Bulstrode* などのように、他人に対する悪意はないが、己のエゴイスティックな欲望が強すぎて他人を犠牲にし、次第にそのことに無感覚になっていくというものであった。グランドコートの性格描写は決して複雑ではない。彼は気まぐれで、自分以外の人間をすべて軽蔑しており、他人を苦しめたり困らせたりすることに快感をおぼえる。そしてそのことが彼の思考・行動の大半の動機となっている。

グエンドリンとの関係において重要なのは、彼が支配欲の権化ともいべき人間として描かれていることである。エリオットは彼を生まれながらの支配者であるとし、次のようにコメントを付している。

No thundrous, bullying superior could have exercised the imperious spell that Grandcourt did. Why, instead of being obeyed, he had never been told to go to a warmer place, was perhaps a mystery to several who found themselves obeying him. (p. 331)

支配者としてのグランドコートはまた、飼い犬たちのうち一匹だけを故意にえこひいきすることによって他の犬たちを嫉妬で身悶えさせて楽しむというエピソードに大変効果的に描き出されている。ここでグランドコートの支配者としての残酷さが犬という動物との関係において描かれているということは大きな意味をもっている。

というのは、グランドコートに支配されている犬たちの姿は、やがて彼の妻となり、犬と同様彼に支配されることになるグエンドリンの姿と二重写しになるからである。後述するが、グランドコートのグエンドリン支配そのものの描写においても動物の比喩がふんだんに用いられている。

ところで、第一節で明らかにしたように、結婚前のグエンドリンのグランドコートの人格に対する理解は甚だ浅薄なものであった。恋人同士の戯れとして自分が与える命令に従うグランドコートを見て、グエンドリンは結婚後も彼を完全に支配できると確信する。しかし一方で、グエンドリンは自分自身にも説明のできない心理状態を経験する。すなわち、彼女はグランドコートに対しては、今までの彼女の崇拜者たちと同様に、大胆で茶目っ気のある応答ができないのである。

But for some mysterious reason — it was a mystery of which she had a faint wondering consciousness — she dared not be satirical: she had begun to feel a wand over her that made her afraid of offending Grandcourt. (p. 158)

また何よりも、自分の意志としてはグランドコートの求婚を受け入れる決心を固めているにもかかわらず (*Mrs. Glasher* の存在を知る以前)、いざ彼が正式に求婚しようとする、自分でもわからず語をそらせて、彼に求婚させまいとする。グエンドリンは自分で自分の行為を不思議にも思い、また後悔もする。「したいようにする」というのが自分の処世術であったはずなのに、自分でも何がしたいのかわからないのだった。

This subjection to a possible self, a self not to be absolutely predicted about, caused her some astonishment and terror: her favourite key of life — doing as she liked — seemed to fail her, and she could not foresee what at a given moment she might like to do. (p. 173)

エリオットはグエンドリンのこのような心理状態について何らコメントを加えておらず、グエンドリンがグランドコートの人間性を理解していないことを指摘する以外は、彼女の意識をそのまま映し出している。このグエンドリンのグランドコートに対する、自分でも理解ので

きない畏れはどのように解釈したらよいだろうか。エリオットが意図したのは恐らくグランドコートと支配力がグエンドリンにも及ぼされていたと読者に理解させることであろう。また、グランドコートに潜む悪の要素がグエンドリンに本能的に感じとられていたことを示すものともとれる。ここで注目すべき三つのエピソードがある。これらは一見今問題としていることと無関係に思われるが、その関連性については後で総括して述べたい。

まず第一のエピソードは、グエンドリンの従兄 Rex の求婚に対する彼女の反応である。彼女は“Pray don't make love to me! I hate it.” (p. 114) と激しく拒絶するが、彼女はレックスが自分を恋しているのを十分承知していたにもかかわらず、実際に愛情をぶつけられると、自分でも予測のつかなかったほど激しい拒絶反応を示したのであった。そのあと彼女は母親に対し“I can't bear any one to be near me but you.” (p. 115) と言う。

第二のエピソードは、愛人の存在を知る以前のグエンドリンがグランドコートと乗馬をしている時のものである。グエンドリンが、今しがた通り過ぎてきた溝を馬で飛び越してみたいとグランドコートに言うと、彼は彼女の提案を実行に移すことを勧める。母親が心配するから、と渋るグエンドリンにグランドコートは、見つからないようにやればいい、となおも執拗に勧める。だが結局グエンドリンはなぜか「自分自身の提案を実行に移すことに反対する気持ちが芽生え」（p. 168）、母親をこわがらせたくないからと言って、馬で飛び越そうとはしない。

第三のエピソードは、グランドコートからキスを受けたグエンドリンの反応である。グエンドリンがグランドコートの求婚を受け入れてしばらくした或る日、グランドコートは初めて頬ではなくうなじにキスをする。グエンドリンは驚いて立ち上がる。少しおどけた笑いを見せて座り直すが、彼女はその時喜びではなく、もはやレックスをもて遊んだようにグランドコートをもて遊ぶことはできないのだと思い、漠然とした畏れを感じていたのだった。キスは彼女にとって愛情ではなく服従のしるしだったのである。

以上の三つのエピソードから、先に述べた、グエンドリンがグランドコートに対して抱いているいわれのない畏れについて第三の要因が考えられないだろうか。すなわち、処女であるグエンドリンが性に対して本能的に畏れを抱いていたということである。このことについて作者は直接的にも、あるいは間接的にも全く触れてはいないが、上のように考えると、グエンドリンのプロットに

おいて直接テーマとは関わりのないように思われる、そして一見何の関連もなくバラバラに孤立しているように見えるいくつかの事柄が意味と関連を生じてくる。

たとえば、グエンドリンと母親のダヴィロー夫人の関係がこのプロットにおいて果たす機能について見てみたい。ダヴィロー夫人が表面的にこのプロットにおいて意味をもつのは、グエンドリンに頼り、彼女に仕えるという全く従属的な存在となることにより、グエンドリンがグランドコートとの結婚を承諾する動機の一つを形成することである。しかし、それだけにしては、グエンドリンとダヴィロー夫人のやりとりなどは不必要なほど詳細に繰り返して描写され、ダヴィロー夫人の心理描写も比較的多く為されている。そして母と子がいわば一体感をもっていたことがたびたび述べられる。たとえばグエンドリンは母を傷つける言葉を口にしたあとで「彼女の知る限り、自責とか自己不信とかいう感情に一番近いもの」（p. 129）を感じる。また、ダヴィロー夫人は姉から「あの子（グエンドリン）が良い方に縁づいてくれるとありがたいがねえ」といわれた時、日頃の従順さにも似合わず、「あんたなんか都合のために、あの子が結婚させられてたまるものですか」（p. 125）と心の中で非づく。エリオットはこれについて「このおとなしい母親も、娘と自分を一体化して考えるときには、いささか無遠慮になった」（p. 125）と述べているが、娘と母親の一体化はそれぞれの側から為されており、特にダヴィロー夫人はグエンドリンを生き甲斐とし、彼女の幸福をそのまま自分の幸福であると感じるような、いわば現代日本社会に多く見られる過保護な母親像に近いものである。グエンドリンの実父も、ダヴィロー夫人の再婚相手であるダヴィロー大尉もすでにこの世になく、母娘の関係は一層緊密さを増している。

分析心理学において母親は大きな意味をもつ。人間は各々無意識の中に、自分自身の母親の像を超えた普遍的な母親像（Great Mother）をもっている。Great Mother は子どもが勝手に「母親」の膝下を離れることを許さない。それは子どもの危険を守るためと同時に、母—子一体という根本原理の破壊を許さないからである。このようにとき、時に動物の母親が実際にすることがあるが、「母親」は子どもを呑みこんでしまう。ゆえに、「母性原理はその肯定的な面においては、生み育てるものであり、否定的には、呑みこみ、しがみつきて、死に到らしめる面をもっている。」<sup>9</sup>人間はその成長過程において、夢の中で母親殺しを行なうことにより自我を確立してい

く。女性の場合は、自分自身が母性を潜在的にもっていることから、自立の過程において自分の内部の母性に反発し、そしてその反発は自分自身の母親に対する反発という形をとる。その一方で、無意識内に集積されている男性的な面が人格化されたもの（アニムス）を現実の男性に投影し、その男性と恋愛し、結婚することによって自らも母親となっていく。しかしながら、母と娘のきずなが強い場合には「母親殺し」がスムーズに行なわれず、その結果アニムスの受容は破壊的暴力的なものとして生じる。河合雄氏はこれをギリシャ神話の、HadesによるPersephoneの強奪にたとえている。大地女神Demeterの娘ペルセフォネは野原で花を摘んでいた。そのとき突如として、地下の国の王であるハデスが四頭立ての馬車に乗り、地面を破って出現し、乙女を強奪して去るのである。「母＝娘のきずなが絶対的強さをもつとき、女性の世界に登場する男性はすべてハデスの如く粗野に荒々しく感じられるであろう。あるいは、このような凄まじい男性の侵入を受けてこそ、娘は母と別れ、自ら母となれるのだと言っているかもしれない。」<sup>7</sup>

グエンドリン、ダヴィロー夫人、グランドコートの関係は、ペルセフォネ、デーメテル、ハデスの関係に置き換えて考えることができよう。グエンドリンは母性に呑みこまれたままであるため、現実の男性に対し女として接することを余儀なくされると恐怖を感じるのである。先に挙げたレックスの求婚や乗馬のエピソードにおいてグエンドリンは母親の膝下に逃げ帰っている。（精神分析学において乗馬が性交を象徴していることは周知のことである。）<sup>8</sup>また、彼女が光の突然の変化により自分が一人であると感じると恐怖をおぼえるというエピソードに先に触れたが、恐怖をおぼえると聞くと、普通常識で考えた場合明から暗への変化だと想像するが、母性の本質の一つに「暗黒の深さ」がある<sup>9</sup>ことを考えると、彼女の恐怖はむしろ暗から明に対してのものであったとも考えられるのである。この点において、「急に暗くなったりすると」などの表現ではなく、単に「光の突然の変化」という表現が用いられていることは大きな意味をもつと思われる。

それでは、結婚後のグエンドリンとグランドコート、すなわち実際に性交渉をもつようになってからの二人の関係はどのように描写されているだろうか。前述したように、グエンドリンもグランドコートも人並外れた支配欲をもっており、互いに結婚後は相手を支配するつもりでいた。だがグエンドリンは予想とは逆に、結婚と同時に

グランドコートの支配下に入ることとなる。客観的に見れば、実際に愛人をもったまま別の女性に求婚したグランドコートこそグエンドリンに対して負い目を感じ、それゆえ彼女の支配を受ける立場に立たされそうに思われる。エリオットは、この支配と服従の関係を決定づけたのは、良心の有無であったとして、道徳的側面から捉えている。すなわち、グエンドリンは愛人の存在を知りながら自分の生活の安楽のためにその愛人を犠牲にして結婚したという罪を恥じ、また自分が知っていたということをグランドコートに知られはしないかと恐れる。グランドコートはそのことを知っていたばかりか、グエンドリンが自分のもとから逃げ出して世間の噂話の的になるようなことには耐えられない気位の高い女性であることも知っていた。しかも、グエンドリンとはちがってグランドコートには良心のかけらもなく、己の罪深さに対して平気でいられた。エリオットはこれらのことがグランドコートの支配を決定的にしたと述べる。

結婚後の二人の会話が初めて描写されるのは、ダイヤモンドをめぐることである。このダイヤモンドはグランドコートがグラッシャー夫人に預けておいた（実際には与えたも同然）のを取り返し、グエンドリンに贈ったものである。グラッシャー夫人は恨みの手紙を添えてそのダイヤモンドをグエンドリンに送りつけたのであった。グエンドリンはBrackenshaw Castle訪問の際、ダイヤモンドには手をつけず、金とエメラルドを身につける。以下は二人のセリフのみを抜き出したものである。

'Am I altogether as you like?'....

'No,'....

'Oh, mercy!'.... 'How am I alter myself?'

'Put on the diamonds,'....

...'Oh, please not. I don't think diamonds suit me.'

'What you think has nothing to do with it.'....'I wish you to wear the diamonds.'

'Pray excuse me; I like these emeralds.'

'Oblige me by telling me your reason for not wearing the diamonds when I desire it.'.... (pp. 480-81)

ダイヤモンドを身につけたくない理由を口にできないグエンドリンはグランドコートの命令通りダイヤモンドを身につける外はなかった。このエピソードが、グエンドリンがグラッシャー夫人から奪うという結果となったダイヤモンドについてのものであることから明らかなよ



うに、エリオットはグランドコートとの支配の確立については道徳的な問題がその決定要素だとしている。実際、グエンドリン・プロットを全体として見た場合も、悪の権化グランドコートと善を象徴するダニエル、そして己の中の善と悪のはざまで揺れ動くグエンドリンという図式は明白である。

しかしながら、上に引用した会話において突然現れるグエンドリンの哀願口調は、結婚前の彼女のからかうような命令口調とはあまりにも対照的で、彼女の回想として述べられている前述の事情を考慮に入れても、彼女の態度の突然の変容は読者にやや唐突な印象を与える。また、引用した会話の間でグエンドリンは「今頬髭を撫でているあの白い手は私の頸に巻きついて私を絞め殺すことができるだろう」と思う (p. 481) が、グランドコートがどんな時にも暴力や罵言を用いずに他人を支配したと何回も確認させられている読者には、この妄想は不均り合いなほど暴力的で生々しく感じられる。これらのエピソードが与える不調和の印象は、グエンドリンとグランドコートの関係を、作者の明白な意図通りに道徳的側面からのみ捉えようとするからではないだろうか。次に挙げる二つの引用は、グランドコートとの支配に対するグランドコートとグエンドリンのそれぞれの独白であるが、ここに用いられている馬による比喩表現は強烈なエロティシズムをかもし出しており、二人の関係を性の側面からも捉えるべきことに読者は気づく。

She had been brought to accept him in spite of everything - brought to kneel down like a horse under training for the arena. .... (p. 365)

'He delights in making the dogs and horses quail: that is half his pleasure in calling them his,' .... 'It will come to be so with me; and I shall quail ....' (p. 482)

馬に限らず、特にグランドコートを描写する場合には、シビレエイ、大蛇、とかげなど不気味な動物の比喩が頻繁に用いられており、グランドコートの獣性・道徳的感性において性に対して一が暗示され、生々しい印象を与えている。前に挙げたグランドコートと飼い犬とのエピソードも同様の効果を与えている。

前にも述べたが、エリオットはグランドコートとグエンドリンの性生活については全く触れていない。また、

彼女がグエンドリンとグランドコートとの関係を道徳的な側面から捉えようとしていたことはテキストに明白に示されている。しかし、現実の人間関係、特に男と女の間を考える場合、性交渉の有無にかかわらず性を抜きにして考えることはできないし、グランドコートとグエンドリンの関係は、夫婦となって性交渉をもつことによりさらに複雑さが加わったはずである。序章において、グエンドリンの性格造型が複雑さを備えていることを指摘したが、それは、この作品において初めて登場人物の性格や、人物間、特に男女間の関係に、性の要素が盛り込まれていることも一つの要因であると思われる。<sup>10</sup>

グエンドリンの結婚前と結婚後のプロットを比較した場合、結婚前のプロットに比べると、結婚後のプロットは何か稀薄になったという印象を与えるが、それは一つには、グランドコートとグエンドリンの間に性交渉が生じ、二人の間に存在する感情や心理的かけひきが一部分、いわば寝室のドアの向こうに隠されてしまい、結婚前のように、読者にすべて公開されなくなったことが関係しているのではないだろうか。結婚後のグエンドリンの関心はあまりにも急速にグラッシャー夫人に対して犯した罪に対してのみ向けられるようになり、グエンドリンのグランドコートに対する感情は道徳的嫌悪感と支配される苦しみだと簡単に説明され、またグランドコートの場合は、グエンドリンを支配することから生じるサディスティックな喜びのみが描写されている。しかも、その支配が確立される過程には、道徳的な問題だけではなく、性の問題も絡んでいると思われるのだが、それは一切知らされない。わずかに、グエンドリンが、グランドコートがグラッシャー夫人に会いに行くことを知り、道徳的嫌悪感を抱いているにもかかわらず、胸の焦げるような嫉妬を感じることに、グランドコートが、自分では意識していないものの、ダニエルに対し嫉妬を感じるというところに夫婦としての二人の心理描写がみられるのみである。性的描写が一切タブー視されたビクトリア朝時代に書かれた小説には無理でないものの、性の要素についてのテーマの展開が中途半端に終わったことは残念である。

次に、グエンドリンとダニエルの関係における性の要素がどのように描写されているかを見てみたい。エリオットはこの二人の関係については、グエンドリンとグランドコートの関係においてよりさらに一層明確に道徳的側面から描こうとしている。前にも少し触れたが、二人の関係は基本的に救済される人間と救済者の関係であ

る。もう少し具体的に言うならば、己のエゴイズムにより犯した罪を悔い、エゴイズムを脱却しようとする人間と、人間愛の実践という至高の義務を説くことによりそれを手助けしようとする理想的人間の関係である。二人のこのような関係は冒頭のエピソードからすではっきりと設定されている。そのエピソードとは、グエンドリンがルーレット賭ばくをしているのをダニエルが非難の目で眺め、しかも彼女が賭け金をつくるために質に入れたネックレスを買い戻し、彼女に送り返すことによって彼女を再び賭ばく場に行かせなくしたというものである。ダニエルのこの干渉の行為は、その後のプロットにおいて彼がグエンドリンの道徳的な成長に果たす役割りを象徴的に表している。

二人の間に恋愛感情が発展しなかったことについては、エリオットは、グエンドリンがダニエルに対して恋愛感情ではなく“confidence”を抱き、ダニエルもグエンドリンの“confidence”を自分に対する“particular claim”だと感じており、しかも二人の間にいわゆる「変な」誤解はどちらの側にもなかったことを繰り返し強調している。(pp. 500,504)。また、次に引用する彼ら二人の会話も上述のことを裏づけている。

*'Then tell me what better I can do,' said Gwendolen, insistently.*

*'Many things. Look on other lives besides your own. See what their troubles are, and how they are borne. Try to care about something in this vast world besides the gratification of small selfish desires. Try to care for what is best in thought and action — something that is good apart from the accidents of your own lot.'*(pp. 501-2)

ダニエルの言葉はまさに説教師のそれである。そしてグエンドリンの方でもダニエルを“priest”として尊敬していると述べられている。

*Without the aid of sacred ceremony or costume, her feelings had turned this man, only a few years older than herself, into a priest; a sort of trust less rare than the fidelity that guards it.*(p. 485)

この他にもグエンドリンがダニエルを“angel” (p. 737) だと思ったり、ダニエルのいる図書室が“chapel” (p. 505)

のようであったという描写が散見する。

しかしながら、このように誤解の余地のない書き方が為されているにもかかわらず、個々の状況下におけるグエンドリンの思考・感情を綿密に見てみると、必ずしも上述の図式にあてはまらないものがあることが感じられる。たとえば、まず新婚7週間のパーティの席上、グエンドリンは人前ではことさらにダニエルに対し冷淡にふるまい、二人きりになると悲しみの表情を満面に浮かべてダニエルを見つめる。また、他人にもっと関心を抱き、もっと知識を得るように諭されたことに対し、彼女がとても説めたものではないと思うような有名な作家たちの本がいわゆる「心の薬」なのか「いたずらっぽく」尋ねてみようかと「半分微笑みながら考え」たりする(pp. 607-8)。さらに、グエンドリンがダニエルと二人きりで話そうと急いで階下に降りて来たときの彼女の心理描写を見てみよう。

*And now he would not look round and find out that she was there! The paper crackled in his hand, his head rose and sank, exploring those stupid columns, and he was evidently stroking his beard, as if this world were a very easy affair to her.... She felt sick with irritation—so fast do young creatures like her absorb misery through invisible suckers of their own fancies—and her face had gathered that peculiar expression which comes with a mortification to which tears are forbidden.*(p. 468)

上に掲げた二、三の例に見られるグエンドリンのダニエルに対する感情は、まだ生々しい男女関係を知らない少女が初恋の男性に対して抱く感情に非常によく似ていないだろうか。グラッシャー夫人の一件で男女関係の生々しさを知り、グランドコート of 性的支配を受けているグエンドリンが、一方で他の男性に対し、初々しいプラトニック・ラブの感情を抱き得るとするのは興味深いことである。

さらに興味をひくのは、エリオットが創造したダニエル像自体が、グエンドリンの思い描くダニエル像とびつたり一致することである。ダニエルはまさに「初恋の男性」の人間なのである。現実においては人々はいたいの場合初恋の男性・女性を美化して思い描いているだけであって、実際のその人は必ずしもそのような理想的人物ではない。だがダニエルは実際に、グエンドリンが想

像する通りの理想的人物であり、しかもグエンドリンと同様プラトニック・ラブ的感情を抱くような人物として描かれている。ダニエルはグランドコートのようにグエンドリンを性の対象として見たりしない。好きな女性がいても心の中にじっと秘めておくような「中世の暁歴の騎士じみたところがあった。」(p. 370)

ダニエルのこのような性格造型は、グエンドリンの救済者となるべき設定、また、この作品のもう一つのプロットであるいわゆるダニエル・プロットにおける彼の役割から考えるとある程度当然のことであろう。ダニエルはもう一つのプロットにおいてシオニズム運動の指導者となるべき理想的人物に描かれている。グエンドリン・プロットにおいてもいわば優等生的存在であり、道徳的非難を受けるような行動はおろか、思考すら行なわない。よってダニエルは物語の最初の段階においてはグエンドリンに好意よりはやや強い感情を抱くが、いったんマイラに対する愛情を自覚すると、グエンドリンに対する感情は急速に“pity” (p. 506) へと変化してしまう。

以上述べてきたことから明らかなように、グエンドリンとダニエルの関係における性の要素は、グランドコートとの関係においてよりも、さらに潜在的なものである。グエンドリンとグランドコート、そしてダニエルが置かれた状況から考えて、グエンドリンとダニエルの関係はもっと性の側面から捉えられてよいはずである。<sup>11</sup>あるいは、グエンドリンのダニエルに対する感情に性の要素が故意か自然にか除外されたプラトニック・ラブが発展する可能性があったと捉えるならば、そのような愛情関係が、グランドコートとグエンドリンの肉体的関係（グエンドリンがグラッシャー夫人に嫉妬を感じることから、このような関係があったとっていいだろう）に対してどういう意味をもつのかというテーマの発展の余地があるだろう。

## 結 び

エリオットは、グエンドリンがダニエルによって送り返されたネックレスを、自分でも理由がわからないままに手放すまいと決意するというエピソードのあとに、次のようなコメントを付している。

There is a great deal of unmapped country within us which would have to be taken into account in an explanation of our gusts and storms. (p. 321)

「我々の中には、我々の突風や嵐を説明する際に考慮に入れなくてはならない、地図にない領域が広大にある」という言葉は、人間の心を形成する意識、及びその奥底にある無意識の領域に対する認識を表している。そして、この認識に基づいて創造されたグエンドリン・ハーレスの性格造型は、エリオットの全小説中のどの登場人物のそれよりも複雑なものとなっている。グエンドリンの良心は過去の人間関係によって培われたものではなく、超自然的な恐怖や漠然とした災難の予感という形をとって、無意識のレベルにおいて初めから存在しているものである。そして、この良心と彼女の生来のエゴイスティックな欲求が相容れない場合、その欲求の強烈さにおいて勝っている方がグエンドリンの言動を支配する。そこには意識的な思考が入り込む余地はない。

その一方でエリオットは、グエンドリンの属する社会の価値観が如何に深く彼女の人格形成に関わっているか、そして彼女自身の意識的努力により彼女の良心がどのように強固にされていったかを示すことにより、人間の人格—無意識の部分を含め—が固定されたものではなく、徐々に変化するものであることを明らかにした。

グエンドリンの性格造型を複雑なものとしているもう一つの要因として、性という要素が挙げられる。エリオットの全作品中この作品において初めて、我々は個々の人間の人格形成、及び人間関係のありように、性の要素が関わっていることを読みとることができる。そして、ここまで読みとることによって初めて我々は、グエンドリン・プロットが相互に緊密な関連をもつエピソードの集積による一つの統一体であることを理解することができる。

## 注

- 1) F.R. Leavis, *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, and Joseph Conrad* (New York: Doubleday and Company, 1954), pp. 28-125.
- 2) ジョージ・エリオットが宿命論をどう捉えていたかについては George Levine, "Determinism and Responsibility," in *PMLA*, 77 (June, 1962), pp. 268-79; rpt. in *A Century of George Eliot Criticism*, University Paperbacks, ed. Gordon S. Haight, (London: Methuen, 1966) pp. 349-60 を参照されたい。
- 3) George Eliot, *Daniel Deronda*, ed. Barbara Hardy (1876; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1982) p. 316. 以下同書よりの引用はすべて頁番号を本文中に記

載する。また、日本語訳については、「ダニエル・デロンダ」(竹之内明子訳)、(大阪：日本教育研究センター、1987)を参考にさせていただいた。

4) George Eliot, *Romola*, ed. Andrew Sanders (1863; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1984), p. 206.

5) 登場人物の思考が言語ではなく視覚的なイメージによって為されている箇所はこの外にも多数見られ、人間の思考内容に対するエリオットの認識の深まりを感じさせる。

6) 河合隼雄『母性社会日本の病理』(東京：中公新書、1976), p. 9.

7) 河合隼雄『無意識の構造』(東京：中公新書、1988), p. 132.

8) この小説において馬のモチーフが果たす役割りは三つある。第一に、本文でも述べたように馬は男性器の象徴であり、乗馬は性交を象徴する。第二に、テキストにもはっきりと書かれてあるように、馬は“the symbols of command and luxury” (「支配とぜいたくの象徴」) (p. 349) である。レックスの馬が専ら運搬用であり、グエンドリンの馬について行くことができず、結局彼を落馬させてしまうのに対し、グランドコートが求婚に際して立派な馬をグエンドリンにプレゼントするというエピソードは、二人の財力の差を暗示している。また「手綱を握る」とか「馬車に乗せられる」などの表現は、それぞれ「支配」と「被支配」の比喩表現として用いられている。第三に、馬は躍動する生命力を象徴する。物語の初めの段階においてグエンドリンの元気の良さは、若い競争馬が出走を待ちかねてパドックの中で跳ね回っている様子にたとえられる。また、グエンドリンは乗馬をすると“animal stimulus” (「動物的刺激」) (p. 102) を感じると述べられている。

9) 前掲『母性社会日本の病理』p. 9

10) ただし、この点についてエリオットが意識的に書いていたとは思われない。ピクトリア朝説者の常識的な倫理観においては性的描写がタブー視されていたために書きたくても書けなかったのだという見方は確かにできる。しかしながら、本節で分析してきたエピソードや比喩などの描写は、表面的には孤立して散らばった形となっており、エリオットはそれについて何らコメントも与えていなければ、互いに関連づけようとする努力も全く払っていない。エリオットのそれまでの作品、またこの作品におけるもう一つのプロット、また全体のテーマの提示の仕方から考えて、意識的で

あったとは考えられない。

11) ダニエル、グエンドリン、グランドコートのいわゆる三角関係における性のテーマについての展開が不十分であることはバーバラ・ハーディも前掲 *Daniel De-ronda* 中の Introduction において指摘している。